

日本の村落空間と広場

福田アジオ

- 一 日本の広場論と村落
- 二 用語としての広場
- 三 村落景観の東西と広場

論 文 要 旨

広場は都市特有の装置であろうか。広場論は基本的に都市を対象に行われてきた。都市の市民の存在が広場を必要とし、広場を作りだしてきたとする。しかし、都市形成の前提としての農村の存在を無視することはできない。都市が農村から完全に断絶して形成されたのではない。本稿は、日本の村落社会における広場の存在形態を考察することで、都市の広場の前提を明らかにしようとするものである。

広場という言葉は近世からのものであるが、日常的に使用されるようになったのは古いことではない。広場に相当する民俗語彙としてはニワとツジがあるが、後者の方がより人々の集合空間としての意味が強い。そのツジが

東日本よりも西日本において頻繁に使用される傾向があることが注目される。そして、それに対応するかのようには、村落景観や村落内部秩序において東西の相違は大きく、それらと密接に関連しているのが人々の集合空間である。東の村落では家々の存在が強調され、会合も個別の家が会場になることが多く、西では人々が集合する施設が設けられてきた。野天における集会のため空地も西において発達している。それは集落の物理的なあり方によっても大きく規定されている。東の集落は屋敷と屋敷の間に田畑があり、そこが臨時的に集合空間となったが、西の集落は家々が壁を連ね、軒を接しているの

で、人々の集合空間を集落内に計画的に設定する必要があったのである。